清代乾隆期の人口増加米貴説について

則松彰文*

はじめに

清代中期江南の一知識人、黄卬が乾隆十八年に著した『錫金識小録』全十二巻のうち、巻一「備参上」は、内容の豊富さと卓越した眼力とが知られる出色の著作である。周知の如く、この著作は、これまで我が国は勿論、中国、台湾における清代史研究においてしばしば引用され、黄卬の書き遺した清代中期とりわけ乾隆時代の江南社会の様相が、今日われわれが抱く乾隆時代像の有力な根拠の一つとなっていると言っても過言ではないだろう(1)。

いま、その『錫金識小録』巻一、備参上、「米価」に注目してみよう。ここで黄卬は、康熙、雍正期に対し、乾隆

＊福岡大学人文学部教授

期に至って米価の高騰が見られるようになったとして、次のように言う。

無錫県に大規模な水旱害が無いにも拘わらず、米価は却って大幅に騰貴している。昔（康熙・雍正時代）は、一石一両が米価の標準だったが、徐々に値上がりし、一・五両が標準となっている。戊辰（乾隆十三年）から庚午（乾隆十五年）にかけて二両以上の値に至り、辛未（乾隆十六年）の冬、ちょうど新米が出る時期には、二両五銭の高値に至り、壬申（乾隆十七年）の春には、とうとう三両にも至った。(2)

乾隆期の米価の高騰について、黄印は「実に不可解なり」と述べた上で、先ず、一般的見解としての、人口増加と米穀の海外流出、これら二つの要因論を紹介し、これらを否定したのちに、(3)自説すなわち米穀流通問題を要因とする米価高騰説を展開するのである。(4)

乾隆期における江南社会の変化、中国社会の変動を鋭敏に肌で感じ取った黄印は、備参上の「米価」ほか「田土之利」「邑紳」「士習」「風俗変遷」などの記述において、康熙・雍正期とは異なる乾隆期の諸相を指摘したのである。(5)

さて、些か前置きが長くなったが、本稿で注目したいのは、黄印が否定した乾隆期の米価騰貴の要因として人口増加に注目する考え方、つまり「人口増加米貴説」についてである。後に詳しく述べるが、乾隆帝の認識においても、当初、この人口増加米貴説は否定の対象であった。それが、後には有力な考え方へと変化を見せるのである。本稿では、この乾隆帝の認識を中心に、乾隆期の中国社会を特徴づける二つの事柄、人口増加と米価騰貴、これらの連関の問題を考えてみたい。

一、乾隆十年代までの認識

まずもって確認しておかねばならない事柄は、清朝国家が主穀たる米穀の生産、その価格動向に細心の注意を払い、国家施策として米穀問題に取り組んだという事である。乾隆帝が乾隆二十三年に、「地方の米価の貴賤は、民生に関係す。是を以て各省の撫臣、例ね應に按月奏報すべし。」[6]と改めて指示した如く、米価の動向が民の安定した暮らし（民生）に深く関わるとの強固な認識のもと、米価の高騰が短期的動向としてではなく、長期的趨勢としての高騰であると認識され始めた乾隆年間には[7]、この米価騰貴にどのように対処するかが、乾隆帝以下の為政者たち、とくに地方統治の任にあった総督や巡撫に問われた大きな課題となった。

乾隆八年四月、その後に展開する全国的な米価騰貴論議の端緒が、乾隆帝の上諭に伺える[8]。

> 乃ち各處の情形を体察するに、米価は惟だ減ぜざるのみに非ず、且つ日に漸く昂貴し、独り歉収の省然りと為すのみならず、即ち年穀順成、幷に素より産米を称するの地にても、亦た前より倍増せざるは無し。以為へらく、生齒の日に繁る耶。則ち十数年の間、豈に遂に衆多此れに至らんや。若し年歳の登（みの）らざるを以為へば、則ち康熙・雍正年間に何ぞ嘗て歉収の歳無からん。其の故を細求するに、実は各省の倉儲を添補するに、先を争いて糴買するの致す所に係われり。

ここで乾隆帝は、米価の継続的上昇傾向が、米穀の豊凶や米産地か否かに関らない事象と捉え、人口増加や米穀の歉

収が要因ではなく、倉儲制度に関わる買い付け問題が米価高騰の要因と認識する。更に乾隆帝は、「朕思うに、天下の米価頻増は、乃ち民食不足の漸と大いに関係有り。」[9]とも述べ、米穀生産量の不足をも視野に納める。

翌九年二月、「米価の貴きこと、原より一歳の騶長に非ざれば、自から一時に騤平せしむること能わず。」[10]との認識を示した乾隆帝は、十二年十二月の上諭をもって、所謂「乾隆十三年の米貴問題」の端緒を開く。「朕思えらく、米穀は民生日用の必需とする所為り。而るに邇年以来、日に騰貴を見れば、窮黎の何ぞ以て此れに堪えんや。（中略）何ぞ連歳遞増し長ずること有るも落つること無きに至らんや。」[11]と述べた上で、皇帝自ら米貴要因として、囤戸居奇、戸口繁滋、水旱偏災、倉儲採買の四つを挙げて、各省の地方官に任地の実情を踏まえた上での米貴要因の分析とその解決策の提示を求めた。[12]

乾隆帝が掲げた米貴要因のうち、二つ目に挙げた人口増加説に関しては、

若し戸口繁滋を謂はば、則ち康熙年間自り以来、休養生息し、便ち應に逐漸加増すれば、何ぞ獨り今日に至りてのみ一時に頓長せんや。

と述べ、[13]康熙年間以来の人口増加の現象が、乾隆期の米価騰貴と直接には結びつかないと論断したのであった。

さて、乾隆十三年を迎えて、中国各地の地方官からは任地の実情に立脚した米価騰貴の要因分析とその解決策の提案とが、陸続と皇帝の元に届くようになる。既に内外の諸研究によって明らかにされる通り、上奏してきた多くの地方官が広く人口増加を認め、その問題を米価騰貴要因の一つとして明確に認識している。しかし、それらはあくまで、

人口増加を前提条件としたうえでの話であり、いわば自明の事柄として認識するにとどまるものと評価すべきである。

河南巡撫の碩色による上奏では、

糧貴の源は、大概生齒の日繁に由れり。一省を以て論ぜば、或いは、此れ貴く而して彼れ賤は、則ち豊歉の齊しからざるに由る。或いは、初め賤く而して後に貴きは、則ち商賈の囤販に由る。

とある如く[14]、人口増加は、あくまでも前提的認識に止まる。また、江西巡撫開泰の上奏にも、

米貴の故は、盡くは囤戸の商販、採買積貯に由らず、大抵は生齒の日繁、地方官の奉行未だ善ならざるに由れり。

とあるが[15]、上奏の内容は、採買と倉儲の問題点に絞られる。この他にも米価高騰の原因として、人口増加を真っ先に挙げる上奏は多いが、先にも述べた通り、その多くは人口増加を主たる要因として米貴論議を展開するものではない。

この点は、従来の研究において、曖昧あるいは些か誤った評価がなされてきたと認めざるを得ない。全漢昇氏は、早く一九六五年に「乾隆十三年的米貴問題」と題する優れた先駆的論文を発表され[16]、乾隆十三年における全国的米貴論議を詳細に分析した上で、一、当時の為政者たちの認識・分析には、貨幣方面の原因に対する注意が払われなかった事、二、地方官僚たちが提出した米貴対策は事実上、米価騰貴の趨勢を有効に抑止することは出来なかった、と指摘してこの論文を締めくくった。全氏は、この全国的な論議において先ず注目すべきは、地方官たちの多くが、米価の継続的上昇に関して人口増加に着目した点だと指摘した。確かに、多くの地方官の上奏冒頭には、米価騰貴の要因として、いの一番に人口増加が挙げられるが、先にも述べた如く、それらは謂わば形式的、一般的な例示に過ぎず、

人口増加を米価騰貴の、まして継続的な価格上昇の真因と認定したものとは、到底みなし得ない。[17]

また、近年、郭松義氏は『清代社会環境和人口行為』を刊行したが、氏も乾隆十三年の米貴論議を評価して「この討論は、関係する問題は少なくなかったが、しかし（朝廷内外の各官員の）皆は〝生齒日繁〟が米穀価格上昇の主要原因の一つと認識したのである」と指摘して、先に紹介した江西巡撫開泰、後述する湖南巡撫楊錫紱、朱倫瀚の三つの上奏を引用して、その例証としたのである。[18]

それらに対して、異彩を放つのが蔣建平氏の『清代前期米谷貿易研究』（一九九二年）である。蔣氏の研究は、実証的で大変優れたそれであるが、第六章「米穀価格波動」の第二節「米穀価格上漲的原因」において、乾隆十三年の米貴問題をも含む清代前期の米価騰貴を論じ、人口増加こそが騰貴の真因であるとした。[19]

さて、「乾隆十三年の米貴問題」に関する上奏のうち、現在、実録によって確認できる全十七件の上奏中、人口増加米貴説として評価できそうなものは、次の三件と言えよう。

先ず、陝西巡撫陳宏謀は、「米価の日に増すは、原より一時の頓長に非ずして、実に生齒の日繁、補救の方に由れり。」[20]と分析した上で、「開闢地利」と「広積倉儲」の二者を提案する。しかし、人口増加による米価騰貴の構造に言及するものではなく、また、二つの提案が、どのように人口増加米貴説に対応するのかも明確ではないため、正確には、この陳宏謀上奏を人口増加米貴説に分類する事は些か無理なのかもしれない。

次に、雲貴総督張允随の上奏を検証してみよう。彼の上奏には、

米貴の由は、一は生齒の日繁に在り、一は積貯の失剤に在り。而して偏災、商販囤積の諸弊は焉れに與らず。天下の沃野は首め巴蜀と称す。昔に在りては、田多く人少なし。米価は極めて賤く、雍正八・九年の間、毎石尚お四・五銭に止まる。今は則ち、動もすれば一両の外に至る。最も賤きも亦た八・九銭なり。貴州の舊案を査するに、乾隆八年自り今に至り、広東・湖南の二省の人民、黔由り川に赴き食に就く者、共に二十四萬三千餘口なり。其の陝西・湖北自り往く者は、更に凡そ幾くなるかを知らず。国家の定蜀、百余年、戸口の増すこと、数十百萬を下らず。而して本地の生聚は尚お此の数に在らず。一省此くの如ければ、天下知るべし。此れ時勢の貴からざるを得ざる者なり。況んや加えて以て採買の已まざるをや。夫れ積貯は病に非ず。病は處處の積貯に在り。採買は失に非ず。失は年年の採買に在り。（中略）乃ち近年米価も亦た前より稍や増すを視るは、特に生聚の滋ます多く、廠民雲集の故を以てす。

とある。[21] 人口増加と米価騰貴との連関に関する具体的な分析は無いが、人口増加が米貴の主因と強調する点で、この張の見解を人口増加米貴説の範疇に入れることは、さほど無理ではないように思われる。

最後に、湖南巡撫楊錫紱の上奏を見てみよう。広く知られる通り、この楊上奏は、乾隆十三年の論議中、出色の内容を誇り、研究史において、従来から注目を集めるものである。楊の上奏は、実録のほか、『皇朝経世文編』に「陳明米貴之由疏」との表題を付して収録されるが（巻三十九、戸政十四、倉儲上）、彼の著作『四知堂文集』巻十、奏疏に収載の記述との異同も多いため、ここでは、以下、『四知堂文集』のものを取り上げることとしよう。楊は、「水

害や旱害といった偏災、囲戸の居寄はまた米穀価格の騰貴を来すに十分ではあるけれども、なお、騰貴の根源的理由ではない。米穀価格の騰貴は、買食者の多さによるもので、それはまた民の貧困に由来する。[22]」と述べ、「戸口繁滋」「風俗日奢」「田帰富戸」「倉穀採買」の四者を挙げる。最初に指摘された「戸口繁滋」に関しては、

戸口繁滋は、則ち今日海宇実在の情形にして、聖諭に謂はく、康熙年間自り以来、休養生息し便ち應に逐漸加増すれば、何ぞ一時に頓長せんやと。以て臣之を観れば、實に亦た未だ嘗て漸増に係わらざるにあらず。臣郷村に生長し、世よ耕作に勤めるに、康熙年間の稲穀登場の時を見るに、毎石二・三銭に過ぎず。雍正年間は、則ち四・五銭を需め、二・三銭の價に復すこと無し。今は則ち、必ず五・六銭を需め、三・四銭の價に復すこと無し。蓋し戸口の多ければ、則ち需穀も亦た多し。数十年の荒土、未だ嘗て墾闢を加えざることあらずと雖も、然れども今日に至り、墾すべきの荒者多く無し。則ち、戸口繁滋は、以て米穀の價の逐漸加増を致すに足ること、勢い必然なり。

と言う。[23] 康熙・雍正・乾隆と米穀価格が上昇し続ける事、また人口増加に伴う米穀需要の増大に見合うだけの耕地の拡大が果たされてはいない事、これらを理由に、楊錫紱は人口増加が米価の継続的高騰要因の一つであると認定したのである。

乾隆十三年の米貴論議に関わる地方官の上奏以外にも、朱倫瀚の見解が従来より知られている。『皇朝経世文編』に収載された文章には、

何ぞ況んや、盛世滋生し、人口日に衆きをや。歳時の豊歉、各處に一になり難し。有限有則の田土を以て、日増日広の民食に供す。此れ更めて多餘を有する能わざる所以なり。多餘の出す所無きを以て、而して各處にて盡力の搬運に供さんと欲す。此れ米穀の日に其の不足を見、價値の日に其の増長を見る所以なり。

とある。[24] ここでは、人口増加に伴う食糧需要の増大と穀物生産量の限界とが、米穀不足、価格騰貴の原因と看做すのである。

以上、本章では、米価騰貴問題が注目を集めた乾隆十年代における認識を検討し、この時代にあっては、人口増加米貴説は少数派であった事を改めて確認した。

二、乾隆二十年代以降における乾隆帝の認識変化

乾隆二十年代に入ると、乾隆帝の認識に大きな変化が現れるが、そのうち、二十四年十月の二つの上諭がきわめて注目に値する。これらの上諭は、『乾隆朝上諭檔』には、収載されていないため、実録から引用することとしよう。先ず、丁酉の上諭において、

試みに思うに、国家の承平、百有余年、民生に兵革を見ず。休養滋息すること、古に於いて罕に倫比有るのみ。而るに、天地の生財は、祇だ此の数有るのみ。生齒漸く繁れば、則ち食貨は漸く貴し。比歳、民数穀数、奏牘は

瞭然たり。

とあり[25]、さらに、戊戌の上諭に、

夫れ国家の承平、百有余年、人生に兵革を見ず。毎歳戸口の孳息すること、千古に罕儔（世に珍しい）たり。民間の穀價は、増すこと有るも減ずること無きは、實に此れに由れり。

とある[26]。これらにおける乾隆帝の見解に特徴的な事は、明確に、人口増加が食貨（食糧と財貨）や穀物の価格高騰の原因だと断言している点である。先述の乾隆十三年の米貴論議において、乾隆帝自身も、また地方官の大半も、いわば単純な人口増加米貴説には懐疑的、ないし否定的であったものが、この乾隆二十四年の段階においては、その認識が明確に変化しているのである。

さらに、乾隆三十七年十月二十二日の上諭では、三十年も前の基準で糧価を「價貴」と奏報する点を厳しく叱責した内容の中で、

閲歳既に久しく、生齒日繁に及べば、則ち用物（必需品・・・筆者注）廣く、而して需める値の自づから増すは、乃ち一定の理に係る。即ち各省の倉糧を買補するは、屢しば増価を請うこと知るべし。方に今、海寓承平し一百二十餘年、戸口は益ます滋し、毎歳数計すること難し。（中略）況んや天下に米を食わざるの人無きをや。米価既に長じ、凡そ物価・夫工の類、此れに准じて遞加せざるは莫し。

と述べ[27]、人口増加による物価上昇に「一定の理」があるとする一方、米価に準じて、物価や「夫工」（職人）の賃金

が上昇するとの認識を示している。

また、乾隆五十年十二月十四日の上諭には、

> 且つ今、戸口日に増し、物価は皆(みな)貴ければ、則ち鹽運・食物の脚価、之を往年に較べば、自づから必ず増すこと有るも減ずること無し。

とあって[28]、人口増加と物価全般の騰貴が関連づけて認識される。

さらに、乾隆五十二年五月十八日の上諭においては、

> 況んや国家は重熙累洽し、生齒の日に繁れば、百物の価値、勢い前に較べて増貴せざる能わず。即ち、従前の一人の食の如きは、今且に二十人を将って之を食らう。其の土地の産する所は、仍お加えること有る能わず。是を以て市集の価値、随時増長せざるあたわず。

とある[29]。乾隆帝は言う、国家の繁栄により人口が増加し、それによって諸物価全般の価格が騰貴している。また、土地の生産高も増加できず、これによって、市場における価格が随時高騰せざるを得ない、と。

さらに、同様の認識は、乾隆五十六年正月乙酉の上諭に、

> 況んや国家の承平日に久しく、生齒の日に繁るも、物産は祇だ此の数有るのみにして、食用は日に漸く加増す。康熙年間、朕は沖齢の時に在り。即ち乳保等の物価昂貴し日を度ること艱難の語有るを聞く。今は又た七十餘年、戸口滋生し、前に較べて奚ぞ啻だ倍蓰するのみならんや。是れ當時の一人の衣食の需は、今且に一・二十人の用

に供す。

とある如くである。[30]

以上、乾隆二十四年、三十七年、五十年、五十二年、および五十六年における乾隆帝の認識を検証してきた。これらを通して明らかな事は、乾隆帝の認識が人口増加米貴説に比重を移したのみならず、ただ米価の騰貴ばかりでなく、人口の増加によって諸物価全般の騰貴が生起しているとの認識を明確に有するようになった点である。

勿論、乾隆帝の認識の変化とは異なり、乾隆十年代における認識と同様、人口増加を米価騰貴の主因とする考えに依然、否定的な論者も当然存在した。一例を挙げれば、『乾隆朝上諭檔』に引かれる、乾隆五十一年九月十八日の徳成上奏に、

近年、京師の米価、逐漸加増し、日に甚だしきこと一日、仰ぎて皇上の民依を念切するを蒙り、多方もて調剤するも、仍お未だ平減せず。或いは以為へらく、米価の貴きは、生齒の日繁、及び年歳の荒歉の致す所に由らん。但だ思うに、生齒の繁は、今日自りに非ずして、数年来、京師に附近する地方は間ま収成歉薄有りと雖も、倶な未だ災を成さず。況んや、官兵の領する俸餉の米石は、歳ごとに常額有るをや。並びに、収成の豊歉に因らずして、盈絀有るは、何ぞ以て米価の逐年加増騰貴すること此くの如きに至らんや。其の情形を揆すれば、自づから別に弊端有るに係り、盡くは齒繁歳歉の致す所に関わるに非ず。

とある如く、[31]人口増加が乾隆期に始まった訳でないこと、人口増加や作物の豊凶と異なる、価格高騰に係わる別の理

由の存在することが主張されている。

以上、本章では、乾隆二十年代以降における乾隆帝の認識の変化、すなわち、それまでの人口増加米貴説に否定的な認識から一転、人口増加を米穀価格高騰の主因に、さらには、諸物価全般にわたる価格上昇の原因と看做す認識への変化を上諭から検証した。本稿において指摘できるのは、その変化のみで、現段階においては、未だその変化の要因につき言及することは出来なかった。

おわりに

台湾の林満紅氏は、乾隆六十年をA・Bの二期に分け、乾隆A期（元年～四十年）を経済困難期とする一方、乾隆B期（四十一年～六十年）を経済活況期とし、A期における人口増加と貨幣の要因を検証した。すなわち、乾隆A期の経済的困難の主因が、日本からの銀が大幅に減少する一方、人口が激増した結果と論じたのであった[32]。先述の如く、早く一九六五年に全漢昇氏が指摘した通り、今日の学界において、単純な人口増加米貴説によって乾隆期の米価騰貴を理解する者はいないであろう。しかし一方で、乾隆十年代の乾隆帝や地方官僚たちが如き論理で否定的に捉える見方もまた正確とは言えないであろう。林満紅論文は、その点からも、あらためて注目に値する。

本稿で指摘したように、乾隆二十年代以降における乾隆帝の認識変化が認められたとして、では、その認識変化に

基づく施策の変化が見られたか否か、あらためて検証が必要である。ただ、乾隆二十年代以降における米価騰貴論議の「鎮静化」は、実録など史料の限定的残存状況から説明すべきではなく、以下のような背景を考える必要があると思われる。

一、この時期における物価上昇が、なだらかに継続的な上昇を描くマイルドインフレーションであったため、経済的な混乱が比較的小規模に抑えられたと思われる点。

二、林論文が注目した汪輝祖の観察[33]に象徴されるように、諸物価全般の高騰が、すべてマイナスに作用したわけではなく、都市近郊農民など庶民の相対的収入増加にもつながった点。

三、平糶を中心とした清朝政府の施策（米穀流通政策や米価安定策）がある程度の実効を見たが故の、相対的な社会の「安定」がもたらされた点[34]。

これらの見通しの是非をも含め、今後さらに検討していくべき多くの余地が残されていると思われる。

註

（1）黄印と『錫金識小録』については、森正夫「『錫金識小録』の性格について」『名古屋大学文学部研究論集』第一二二号、史学四一、一九九五年、のち、同『森正夫明清史論集』第三巻、地域社会・研究方法、汲古書院、二〇〇六年、所収。

（2）［原文］邑無大水旱而米價反大躍貴。昔以一兩為平者、漸以兩半為平。戊辰至庚午至二兩外、辛未之冬、正出米之時、而貴至

二兩五錢、至壬申之春、竟至三兩矣。

（3）［原文］米價之貴、實不可解。或言、生息日蕃、食之者衆、則聖祖太平六十一年、世宗十有三年、歷七十余年之久、民不益衆。近今十余年間、民遂大蕃、恐未必然也。或言、全田放米出洋、故日益少。此則督撫及府州県官之責矣。

（4）黄印の主張は、当該時期における米穀流通問題の核心を突く大変興味深いものであるが、この点に関する分析は後考に委ねたい。

（5）黄印のこれらの記述を引用して清代中期の変化に言及したものに、稲田清一「清代江南の世相と士風」小野和子編『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所、一九九六年、所収、則松彰文「清代中期江南における流行衣料について」『和田博徳教授古稀記念　明清時代の法と社会』汲古書院、一九九三年、所収、などがある。

（6）『清実録』乾隆二十三年五月己亥の上諭。

［原文］地方米價貴賤、関係民生。是以各省撫臣、例應按月奏報。

（7）この点に関して、岸本美緒「清代前期江南の米価動向」、および「清代中期経済政策の基調」、同『清代中国の物価と経済変動』研文出版、一九九七年（前者の原載は、『史学雑誌』八七編九号、一九七八年、後者の原載は、『近きにありて』一一号、一九八七年）、参照。

（8）『清実録』乾隆八年四月己亥の上諭。

［原文］乃體察各處情形、米價非惟不減、且日漸昂貴、不獨歉収之省為然、即年穀順成、并素稱産米之地、亦無不倍増於前。以

為生齒日繁耶。則十数年之間、豈遂衆多至此。若以為年歳不登、則康熙・雍正年間、何嘗無歉収之歳、細求其故、實係各省添補倉儲、争先糴買之所致。

（9）同前、上論。

［原文］朕思、天下米價頻増、乃民食不足之漸、大有関係。

（10）『清実録』乾隆九年二月癸酉の上論。

［原文］米價之貴、原非一歳驟長、自不能一時驟平。

（11）『清実録』乾隆十二年十二月戊辰の上論。

［原文］朕思、米穀為民生日用所必需。而邇年以来、日見騰貴、窮黎何以堪此。（中略）何至連歳遞増、有長無落。

（12）前掲、註（7）の岸本美緒「清代中期経済政策の基調」岸本著書、三〇三～三〇四頁、参照。

（13）同前、上論。

［原文］若謂戸口繁滋、則自康熙年間以来、休養生息、便應逐漸加増、何獨至今日而一時頓長。

（14）『清実録』乾隆十三年正月是月の条。

［原文］糧貴之源、大概由於生齒日繁。以一省而論、或此貴而彼賤、則由於豐歉不齊。或初賤而後貴、則由於商賈囤販。

（15）『清実録』乾隆十三年三月是月の条。

［原文］米貴之故、不盡由囤戸商販、採買積貯。大抵由於生齒日繁、地方官奉行未善。

(16) 全漢昇「乾隆十三年的米貴問題」『慶祝李済先生七十歲論文集』台北、一九六五年、のち同『中国経済史論叢』第二冊、新亜研究所（香港中文大学新亜書院）一九七二年、所収。

(17) 則松彰文「清代中期の経済政策に関する一試論 ―乾隆十三年（一七四八）の米貴問題を中心に―」『九州大学東洋史論集』一七号、一九八九年、二二七頁～二三〇頁において既に言及したことがある。

(18) 郭松義『清代社会環境和人口行為』（陳支平主編、中国社会経済史研究叢書）天津古籍出版社、二〇一二年、五～六頁、参照。

(19) 蔣建平『清代前期米谷貿易研究』北京大学出版社、一九九二年、一九三頁、参照。

(20) 『清実録』乾隆十三年六月癸亥の条。

[原文]米價日增、原非一時頓長、實由生齒日繁、補救之方。

(21) 『清実録』乾隆十三年三月是月の条。

[原文]米貴之由、一在生齒日繁、一在積貯失劑。而偏災商販、囤積諸弊不與焉。天下沃野、首稱巴蜀。在昔田多人少、米價極賤、雍正八九年間、每石尚止四五錢。今則動至一兩外。最賤亦八九錢。查貴州舊案、自乾隆八年至今、広東・湖南二省人民、由黔赴川就食者、共二十四萬三千余口。其自陝西・湖北往者、更不知凡幾。国家定蜀、百余年。戶口之增、不数十百萬。而本地生聚、尚不在此数。一省如此、天下可知。此時勢之不得不貴者。況加以採買之不已乎。夫積貯非病、病在處處積貯。採買非失、失在年年採買。（中略）乃近年米價、亦視前稍增者、特以生聚滋多、廠民雲集之故。

(22) 楊錫紱『四知堂文集』巻十、奏疏。

［原文］臣伏査、水旱偏災與囤戸居寄、雖亦足致米穀之貴、然尚非所由貴之源也。臣竊以、米穀之貴、由於買食者多。買食之多、由於民貧。

(23) 同前、奏疏。

［原文］戸口繁滋、則今日海宇實在情形、聖諭謂自康熙年間以来、休養生息、便應逐漸加増、何至一時頓長。以臣観之、實亦未嘗不係漸増。臣生長郷村世勤耕作、見康熙年間稲穀登場之時、毎石不過二・三銭。雍正間、則需四・五銭、無復二・三銭之價。今則、必需五・六銭、無復三・四銭之價。蓋戸口多、則需穀亦多。雖数十年間、荒土未嘗不加墾闢、然至今日、而無可墾之荒者多矣。則戸口繁滋、足以致米穀之價、逐漸加増、勢必然也。

(24)『皇朝経世文編』巻三十九、戸政十四、倉儲上。

［原文］何況盛世滋生、人口日衆、歳時豊歉、各處難一。以有限有則之田土、供日増日広之民食。此所以不能更有多餘。以無多餘之所出、而欲供各處盡力之搬運。此所以米穀日見其不足、價値日見其増長。

(25) ［原文］試思、国家承平百有餘年、民生不見兵革。休養滋息、於古罕有倫比。而天地生財、祇有此数。生齒漸繁、則食貨漸貴。比歳、民数穀数、奏牘瞭然。

(26) ［原文］夫国家承平、百有餘年、人生不見兵革。毎歳戸口孳息、千古罕儔。民間穀價、有増而無減、實由於此。

(27)『乾隆朝上諭檔』第七冊、乾隆三十七年十月二十二日の上諭。

［原文］及閲歳既久、生齒日繁、則用物廣而需値自増、乃係一定之理。即各省買補倉糧、屢請増價可知矣。方今海寓承平、一百

二十餘年、戸口益滋、毎歳難於数計。（中略）況天下無不食米之人、米價既長、凡物價夫工之類、莫不准此遞加。

（28）『乾隆朝上諭檔』第十二冊、乾隆五十年十二月十四日の上諭。

［原文］今戸口日増、物價胥貴、則鹽運之食物脚價、較之往年、自有増無減。（『清実録』には、「鹽運」ではなく、「運鹽」とある）

（29）『乾隆朝上諭檔』第十三冊、乾隆五十二年五月十八日の上諭。

［原文］況国家重熙累洽、生齒日繁、百物價値、勢不能不較前増貴。即如従前一人之食、今且将二十人食之。其土地所産、仍不能有加。是以市集價値不能不隨時増長。

（30）『乾隆朝上諭檔』第十六冊、乾隆五十六年正月十日の上諭。

［原文］況国家承平日久、生齒日繁、物産祇有此数、而食用日漸加増。康熙年間、朕在沖齢時、即聞乳保等有物價昂貴、度日艱難之語。今七十餘年、戸口滋生、較前奚啻倍蓰。是當時一人衣食之需、今且供一・二十人之用。

（31）『乾隆朝上諭檔』第十三冊、乾隆五十一年九月十八日の徳成上奏。

［原文］近年京師米價、逐漸加増、日甚一日。仰蒙皇上念切民依、多方調劑、仍未平減。或以為米價之貴、由於生齒日繁、及年歳荒歉所致。但思生齒之繁、非自今日、而數年来、附近京師地方、雖間有収成歉薄、倶未成災。況官兵支領俸餉米石、歳有常額。並不因収成豊歉而有盈絀、何以米價逐年加増騰貴、至於如此。揆其情形、自係別有弊端、非盡関齒繁歳歉所致。

（32）林滿紅「世界經濟與近代中國農業―清人汪輝祖一段乾隆糧價記述之解析―」中央研究院近代史研究所編『近代中國農村經濟

史研討會論文集』一九八九年、所収。林「與岸本教授論清乾隆年間的經濟」『中央研究院近代史研究所集刊』第二十八期、一九九八年。林論文に対する岸本美緒氏との論争が誠に興味深い。岸本美緒「評林滿紅〈世界經濟與近代中國農業—清人汪輝祖一段乾隆糧價記述之解析〉一文」同前、所収。

(33) 汪輝祖『病榻夢痕録』巻下、参照。前掲、註(32)の林論文、参照。

(34) 則松彰文「清代乾隆期の江南における救荒と食糧流通政策」『川勝守・賢亮博士古稀記念　東方学論集』汲古書院、二〇一三年、所収。なお、張宏傑『飢餓的盛世　—乾隆時代的得与失—』湖南人民出版社、二〇一二年もある。